

佐土原キリスト教会 2023年10月1日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書5章21～26節

説教題：怒りに支配されるな

あるクリスチャンのビジネスマンがいました。部下が仕事でとんでもないことをしでかしました。彼はさすがに腹に据えかねました。しかし『『ばか者』と言う者は地獄に投げ込まれる』というイエス様の言葉を知ってしまいました。それで、とっさに「アホ者」と怒鳴ったということです。「ばか」も「アホ」もあまり変わらないと思いますが…。

前回の箇所でイエス様は「あなたがたの義…(は)、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでな…(ければならない)」(20)と言われました。その「律法学者やパリサイ人にまさる義(生き方)」について、21節から具体的に教えて行かれます。ここはその最初の箇所です。21～22節、「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでも裁きを受けなければなりません」(21～22)。「昔の人々に…と言われたのを、あなたがたは聞いています」ということは、律法学者やパリサイ人によって人々がそう教えられていたということです。「殺してはならない」というのは「旧約聖書」の「十戒」の「第五戒」です。「人を殺すな」、それは人間社会が成立する最も基本的な戒めです。だからイエス様も、まずこのことを取り上げられたのかも知れません。しかしその後の「人を殺す者はさばきを受けなければならない」という部分は、律法学者が付け足して教えた部分です。「十戒」を理解するポイントは、『～しなさい』という肯定命令には『～してはならない』という否定命令が含まれ、『～してはならない』という否定命令には『～しなさい』という肯定命令が含まれている」といことを念頭に読むことです。「殺してはならない」という否定命令には、「隣人の生命を大切にしなさい」という肯定命令が含まれているのです。「殺さなければ良い」ということではないのです。しかし律法学者は、「人を殺す者はさばきを受けなければならない」と付け足すことによって、それを「殺さなければ良い」という「戒め」に変えてしまったのです。

それに対してイエスは、「殺してはならない」という「戒め」が本来持っていた深い意味を語られるのです。それが「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでも裁きを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会上に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は、燃えるゲヘナに投げ込まれます」(22)という言葉です。「殺してはいけない」という戒めであれば、私達はどこまでそれを真剣に受け止めるでしょうか。「私は人を殺すような悪い人間ではない」と、私達は思います。でもイエスは、「殺す者」どころか「腹を立てる者(怒る者)」も「裁きを受けなければならない」と言われます。なぜ「怒り」をそれほど重く取り扱われるのでしょうか。

初代教会の頃、既にここを「兄弟に向かって『理由なしに』腹を立てる者は」と条件をつけて読むとした人々がいたそうです。それほど単に「腹を立てるな」という戒めは厳しく思えたということでしょう。この「腹を立てるな」というのは、瞬間的にムラッと来る怒り、あるいは義憤(悪に対する怒り)、そのような怒りのことを言うておられるのではありません。ここの怒りは、「根に持つ怒り、忘れようとしないう怒り、和解しようとしないう怒り」、そのような意味で「怒るな、腹を立てるな」と言われているようです。「正しい怒り」というものもあるのだと思います。親身になるが故に、相手のことを思って怒る、そういうこともあるだろうと思います。だからそういうことも認めた上で、しかし私達が怒る時、私達の心にはどのような思いがあるのでしょうか。「怒る者の心を支えているのは正義感だ」という言葉を聞いたことがあります。「自分が悪かった」と思って私達は怒るのでしょうか。もし「自分も悪かった」と思ったら、私達の怒りは和らぎざるを得ないでしょう。でもそうではない。私達が怒る時、「相手が悪い、自分が怒るのは当たり前だ」という思いになるから怒るのではないのでしょうか。つまり、怒る時にはいつも「私が正しい」という「理由」があるのです。「私は正しい、相手が間違っている」と思って怒る訳ですから、「怒る」というのは、「お前はこうだ」

と「相手を裁いて決めつけること」です。しかも怒りを口に出すとしたら、なおさらです。「能無し」とは「お前の頭は空っぽだ」、「お前には人間としての価値がない」と言うことです。人との関係における裁きです。「ばか者」というのは「神に呪われた者よ」、「神に呪われよ」という意味です。神との関係における裁きです。そのように相手を決めつけ、しかも呪うなら、「お前なんかいない方が良いのだ」と心の中で相手を殺してしまうことなのです。人間の裁きは「行ったこと」しか裁かないでしょうが、「心を見られる」神からすれば、それは重大な問題です。だからイエスはこう教えられるのです。

そして私達も、私達が「怒り」を戒められる理由がいくつか考えられます。例えば、私達が誰かに対して怒っている、しかし、その相手がしている同じことを自分がすることはしないのか、ということです。「姦淫の女」の話の中で、姦淫の現場で押さえられた女に向かって、指導者達は怒りに燃えて「先生、こんな女は石打ですよ」と石を投げつけようとしていました。その彼らに向かってイエスは言われました。「あなたがたの中で罪のないものが彼女に石を投げなさい」(ヨハネ 8:7)。「あなた方には同じ罪はないのか」と言われました。私達は、自分がして欲しくないことを誰かにしてしまうことはないでしょうか。あるいは、神の憐れみがなければ、同じことをしたかも知れない自分ではなかったのでしょうか。そう考えた時、「怒りに支配されて相手を決めつけ、憎む、呪う」という生き方は正されなければならないのではないのでしょうか。あるいは、もっと根本的な問題として、私達が誰かに対して怒る、「その怒りが本当に正しいのか」ということもあると思います。私は、僻地校を出る時に、私と入れ替わりに教務主任になる先生に対して怒りました。次年度の引継ぎ作業の中で、その先生の態度に、私はプライドを傷つけられました。それで怒りました。プライドを傷つけられたり、「低く見られた」と感じた時、私達は「感情的に」怒る。私達の「怒り」は、多分にそういうものを含むのではないのでしょうか。こんなこともありました。私はあることである人に対して怒りました。「絶対に自分は正しい、相手が間違っている」と思ったのです。でもしばらくした時、私は、「私が間違っていました」と神に祈っていました。私達の怒りは、そのような不確かさも持つのではないのでしょうか。

さらに、「怒り」は—(いつもそうだという訳ではないかも知れませんが)—人を破壊し、自分を破壊してしまうことがあるのです。「上司が部下を怒鳴り、どなられた部下が家に帰って子供を怒鳴り、怒鳴られた子供が猫を怒鳴り…」とある本に書いてありました。「怒り」は連鎖しながら私達の生活を破壊して行くのです。ある時バスが放火されるという事件があったそうです。人の命を脅かすようなことをなぜしたのか。「怒り」でした。自分が他の人から相手にされない、その「怒り」が爆発したのです。しかし結局、自分を破壊した。しばらく前、キング牧師の話をしました。黒人が公民権運動に立ち上がって行く、それを白人が弾圧する、その時にも、弾圧する人々の中にあっただのは「怒り」だったそうです。「黒人が何を生意気な、身の程を知れ」というような「怒り」。それが彼らの生き方を誤らせました。黒人を破壊すると同時に、「自分達に神の裁きを招くようなことをしてしまった」という意味で、自分をも破壊して行ったのです。

ある人が言いました。「人間の成熟の在り方が『怒りを認め、その怒りがコントロール出来ない程になる前に、きちんと取り扱うこと』だとしたら、誰も殆ど成熟していないように見える」。だからこそイエス様は「人の義」の重要なポイントとして、「殺してはならない」という「戒め」を取り上げ、その背後に人間が抱えている大きな問題、「怒り」について、「怒ることが、そもそも人の命を、自分を大切にしていないことなのだ」と、怒りに支配されないことの重要性を語られたのではないのでしょうか。

しかし、イエス様の教えはここで終わらないのです。「今日は怒らずに済んだぞ、良かった」という生き方が到達点ではないのです。「〇〇をしなかったから大丈夫」というのは「律法学者、パリサイ人の義」です。イエス様は「キリスト者の義は、律法学者、パリサイ人に優るものでなければならぬ」と言われます。では「どうしなさい」と言われるのか。それが23節以降の言葉です。結論から言えば「兄弟姉妹に、隣人に対して、『怒らない』というだけでなく、『憎まない』というだけ

でなく、『その人と和解しなさい、友達になりなさい』と言われるのです。23～24 節、「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい」(23～24)。今イエスはガリラヤで語っておられます。ガリラヤからエルサレムの神殿に行きます。そして神殿の祭壇で捧げものをしようとした時に、「そこで兄弟に憎まれていることを思い出したら、捧げものをそこにおいて、3 日かけてガリラヤまで帰って来て、兄弟と仲直りして、そしてまた 3 日かけて再びエルサレムに行って、改めて捧げものをしなさい」と言われる。現実にはあり得ない話です。でもイエスは、大げさな話をすることで、大切なポイントを伝えようとしておられるのです。それは、神の民にとって礼拝することは何より大切、「その大切な礼拝を途中で止めてまで、そうしなさい」と言われるのですから、「兄弟姉妹と、隣人と、和解することが、どれだけ神の前に重要か」ということです。もっと言えば、「兄弟との和解、隣人との和解は、神礼拝に先立つ」と言っても良いかも知れません。

しかし、なぜそうなのか。「今日は怒らなかつた、憎まなかつた」、それでは本当の解決にならないからです。相手との緊張関係は続く。問題は、心にある「怒り、裁き、憎しみ」は、そのまま残る。そして何より重要なことは「神の前で、兄弟への怒り、隣人への怒りをくすぶらせたまま、憎しみを秘めたまま、それで神の前に出て、神との和解が出来るのか、それを神が受け取って下さるのか」ということだと思います。極端な話ですが、あるクリスチャンが、教会に来て、礼拝の中で「神様、あの人が病気になるか、死ぬかして下さい」と熱心に祈っていたという話があります。私もある時期、心の中である人を恨みながら礼拝をしていた時期があります。神に受け入れられるのでしょうか。例えるなら、イエスはこう言っておられるのです。「教会に集って礼拝する時、あなた方は、まず神に受け入れられることを願う。しかしあなた方の中に、まだ『あいつだけは赦せない』、『この人だけは憎い』と思っている人はいないか…そういう人々への憎しみを心に抱いたまま、神の前に立つことが出来るのか」。いずれにしても、聖書では、神を愛することは、人を愛することとセットです。であれば、神との関係を整えることは、人との関係を整えることなのだと思います。

ジョン・セイルハマーという神学者が「なぜ神は祈りに答えられないのか」というメッセージの中で「神が祈りに答えられない 10 の理由」を挙げているのですが、その中の 3 つは「他人に対して恨みを抱いているから。他人を許していないから。ねたみ深く、批判的であるから」というものです。隣人との関係が、私達の神との関係を破壊してしまうと言うのです。だからこそイエスは「ただ兄弟に対して、隣人に対して、怒らなければ良い」ということではなく、キリスト者の生き方として「その人と和解しなさい、友達になるような生き方をしなさい」と言われる。「それこそが、本当に『命を大切にすること』だし、『問題の解決でもある』し、『神との関係を整える方法である』」と言われるのです。

もちろん「和解」は難しい。友達になるのは難しい。特に「私が怒るのは当然だ」と思っている相手と和解するのはもの凄く難しいです。自分が握りしめていた「抛り所」を手放すようなものです。(私は先程の方と和解するのに 2 年かかりました)。でも、なぜキリスト者はそこにまで踏み出して行かなければならないのか。25 節に「裁判官」という言葉が出て来ます。これは「神様」のことです。つまり神がそれを願われる。私達が「主」と仰ぐイエス様が「そのように生きなさい」と言われる。「それが祝福の生き方だ、キリスト者の生き方だ」と言われるのです。そしてイエスご自身が、誰よりも人に対して怒って良いはずだったのに、怒りではなく十字架上で「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)と最後まで和解に生きて見せられたのです。そのように生き抜かれた方だからこそ、「人の命を大切に生きなさい、友達になることを求めなさい、私に従いなさい」と言えるのです。私達はその主の言葉を信じるのです。CS ルイスは言いました。「『信ずる』と言いながら、キリストの仰ることに全く注意を払わないというのでは、そんなものは信仰でも何でもなし。そんなものは、十字架についての何かの知識を持っているというだけにすぎない」(CS ルイス)。チャレンジです。

前にもご紹介した「砕かれて」という「証」を改めて読み直しました。この姉妹は、結婚してご主人のお母さんと同居をしましたが、やがて義理のお母さんとの仲が悪くなるのです。子供が生まれたのを期に、激しいやり取りの末に別居します。ある日、事情があつて印鑑を借りるために姑さんのところを訪ねました。しかし姑さんがそれを突っぱねて、嫁と姑のぶつかり合いが頂点に達します。しかしその後、彼女は、夫が養子で、姑が1人で育て上げたことを知ります。また同じ時期、姑さんが「手術をします」と電話をかけて来たけど無視したことで自責の念を感じ始めます。そんな時、誘われて教会に行くようになり、聖書の言葉を聞くのです。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいませ。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」(マタイ 6:14~15)。彼女は「神が姑を赦せとおっしゃっている」と感じて祈ります。「主よ、あなたが…私を赦して下さいましたから、私も姑を赦します。姑が私に和解を求めて来たら喜んで和解します」。そうしたら、また御言葉が語られました。「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい」(23~24)。「主よ、あなたは私が先に赦せとおっしゃるのですか。私から先に和解の手を伸べよ…と」。彼女は、激しい葛藤の末、十字架のイエス様の幻を見せられ、「主よ、御言葉に従います」と言うのです。彼女は、蒲団乾燥機に「いつも平安がありますように祈っています。寂しくなったらいつでもこちらへ来て下さい」というメッセージを添えてお姑さんに送りました。すると数日して姑さんから返事がありました。「身も心も温かい不思議な光に包まれて、生きる力が満ちてくるのを感じます。ありがとう、ありがとう」。やがて姑さんが訪ねて来て、感激に満ちた交わりをします。彼女は感動さえ覚えながら主に心からの感謝を捧げるのです。カナダ・メノナイト教会総会で聞いたメッセージです。「神に従うことは危険な務めです。しかし、そこで見られる光景は驚くような光景です」。

和解は苦しい、友達になろうとすることは難しい。でもそれを可能にするのは、十字架のイエス様を見上げることなのだと思います。主を見上げ、主に従って、一步踏み出す、私達はそれを期待されているのだと思います。「怒りはないか」、「恨みはないか」、「和解はあるか」、自分の生きている現実をもう一度見つめ直し、主のチャレンジに応えて行きたいと願います。